

## 安全で快適な歩道

現代は基幹的な道路網も整備され、移動の手段は目的地の遠近を問わず車を利用する車社会であり、地方部に至っては日用品の買い物等も住宅地から距離があるため、その様相も一層強くなる。

車社会に付きまとう問題として、慢性的な渋滞があげられる。これは、車を利用する人口が大きいことが根源であると思われる。

そこで、出来る限り車の利用を抑制し、徒歩・自転車利用を促進するための道路整備を提案する。

どのようにして、徒歩・自転車利用を促すか？

まず、基本的なことだが、一つ目に歩行者等の安全確保を考える。歩道幅員が狭かったり、照明が少なく夜になると極端に暗くなる道は避けてしまうものである。このことから、十分な幅員の確保、横断防止柵の設置、歩道照明の設置による防犯対策を行う。幅員の確保においては極端に広くする必要はなく、道路構造令に示されている歩道幅員を確保することで十分だと考える。しかし、スクールゾーンなどに該当する場所においては、小学生などはグループでの登下校を行っているため、少しゆとりのある幅員を設定し、横断防止柵等の安全対策を講じる。加えて、歩道照明の設置により、車道からでもハッキリと歩行者が確認できる明るさを確保する。このとき植樹帯等は車道と歩道との視界を遮断してしまうため一切設けない。

二つ目に快適性を考える。この快適性とは、歩行者における歩きやすさ・自転車での走行性はもちろんのこと、休憩・憩いのスペースを設けることにある。

歩きやすさの面では、景観性よりも歩行性・走行性の良い舗装材料を優先的に使用する。いくら景観的に優れていてもゴツゴツとして歩きにくい舗装材料は使用しない。そして、一定の間隔で休憩スペースを設ける。そのスペースには東屋等を設けて休憩だけでなく、近隣住民の共有スペースとしても利用できる空間とし、急な雨の際の一時的な雨宿りはもとより、幅広い世代における交流の場所として位置づける。

住民の徒歩や自転車利用の意欲を掻き立てて、ちょっとした買い物から、「少しでも早起して歩いて通勤しよう」と思えるような歩道を整備することにより、その地域の安全性の向上、世代間交流、加えて渋滞緩和にもつながる。新鮮味にかけた発想で、実現するに当たっては様々な問題があるが、実現できればより良い生活環境となるだろう。